

# Kohut の自己心理学に関する実証的研究の動向と今後の課題

## An Overview and perspective of statistical studies about Kohut's self psychology

小林 卓也

(東京成徳大学 心理学研究科 博士後期課程)

*Takuya KOBAYASHI* (Graduate School of Psychology, Tokyo Seitoku University)

### 要 約

国内外において、Kohut が提唱した自己心理学の臨床的な支持が高まる一方で、自己心理学に関する実証的研究は、数少ない。国内外における自己心理学の実証的研究を分類した結果、1) 「自己愛」を一側面で捉え研究したもの、2) 「自己愛」を二側面で捉え研究したもの、3) 「自己対象体験」を実証的に研究したもの、4) その他の概念を実証的に捉えたもの、の大きく4つに集約された。そして、今後の研究の課題として、1) 自己愛を二側面として捉えた尺度と、他の変数との関連を検討する、2) 「自己対象体験」に関する尺度を作成し、信頼性と妥当性を検討する、3) 日本の文化的背景を考慮した自己-自己対象関係を測定する尺度を作成し信頼性と妥当性を検討する、という点において、今後の研究の必要性が考えられる。

キーワード：Kohut、自己心理学

### I. はじめに

Kohut (1971, 1977, 1984) によって先鞭がつけられた精神分析の新しい流れとしての自己心理学は、現在、精神分析内だけではなく様々な臨床現場において注目と支持を受けてきている。我が国では、10年ほど前から Kohut の自己心理学が現代の若者の病理・行動・人格を説明するために用いられてきた (中西・佐方, 1986)。

しかし、残念ながら自己心理学で提唱された概念や知見に対する、臨床心理学による実証的研究の報告は、内外を問わず少ないのが現状である。そのため、自己心理学の概念に即した尺度の開発など、実証的な研究を行うことが自己心理学の更

なる探求に必要不可欠である。

そこで、本稿では文献研究により、自己心理学の研究の動向を概観し、これらの研究の課題と今後の方向性を明らかにする。それにより、事例研究では多くの報告がなされている自己心理学に、実証的資料を与えることを目指すものである。

### II. 文献検索の方法

文献検索の方法は、まず国内の研究に関しては、日外アソシエーツが提供している MAGAZINEPLUS を使用し、自己愛、ナルシシズム、自己対象、コフトをキーワードに、2003年の7月までの論文を検索した。その結果、239件の研究が抽出され

た。その中から、自己心理学を中心に扱っている論文33件を抽出した。また、海外の研究については ProQuest Information and Learning 社が提供している PsycINFO を使用し、narcissism、selfobject、Kohut、をキーワードに、2003年7月までの論文を検索した。その結果、おおよそ事例研究や文献研究であった。そのため海外の文献に関しては、国内の研究で引用・参考文献として記述されている論文から、自己心理学に関し実証的研究を行った論文9件を抽出した。最終的には、42論文を対象に文献研究を実施した。なお、本稿において詳しく引用した主な論文については、要点を Table 1・2 にまとめた。

### Ⅲ. 自己心理学理論の概要と尺度

#### 1. 定義

自己愛の「誇大感」の現象に主に注目している古典的精神分析や自我心理学の理論とは異なり、Kohut (1971, 1977, 1984) の自己心理学理論は、「誇大感」と「理想化」の2極の自己愛の側面に注目している。ここでいう「誇大感」とは、正常な発達過程で、幼児的な顕示性や主張性が、親による適切な鏡映(注意を向け、達成を認めることなど)機能によって、次第に「野心」へと変化していくものである。また、「理想化」とは、幼児期に自分を慰め、暖かく包んでくれる対照を万能的対象として理想化し、その対象と融合したいという欲求で、親による適切な理想化イメージを与えられると、次第に自分自身の中に「理想」として内在化されていくものである。また、Kohut (1984) では第3の自己愛が「誇大感」より独立して論じられている。それは、本質的に自分と類似しているという、安心の体験を与えることのできる自己対象を求める自己愛のことであり、「才能および技能」という領域に関わるものである。

そして、自己心理学理論においては、このような自己愛を生まれてから死ぬまで維持し、自己感

覚の安定性を保つ自己の凝集性(融和性)を高めるために、他の人間を理想化する欲求、他の人間から認められたい欲求、他の人間との共通性の感覚を感じたい欲求という、それぞれの自己対象欲求が存在すると考えられている。これらは、それぞれ「鏡映自己対象」欲求、「理想化自己対象」欲求、「双子自己対象」欲求と呼ばれている。また、そのような欲求を満たす対象は、自分自身の存在から心理的に分離したものとしては体験されずに、自己の一部のように感じられる場合がある。この場合、自己対象は内在化されたと考えられる。そして、この自己対象体験を通じて起こる変容性内在化 transmuting internalization が、自己の成長や成熟に寄与してくものだと考えられている。

#### 2. 尺度

##### 1) 「自己愛」に関する尺度について

自己愛の実証的研究は、Rakin & Hall (1979) が正常な人格特性として自己愛傾向を測定する目的で、DSM-III の基準に基づいた Narcissistic Personality Inventory (自己愛人格目録 NPI) を開発したのを皮切りに、数多くの研究が行われてきた。その後 NPI は、Emmons (1984) などにより、信頼性と妥当性が確認されている。日本でも、1980年代後半より NPI あるいは佐方 (1986) の NPI を使用した研究が盛んに行われてきた。しかし、YG 性格検査(大石, 1987)、自尊感情および友人関係(小塩, 1998) など、そのほとんどが他の尺度との相関に基づき NPI の因子構造・妥当性の検証を行い、自己愛人格の特徴を明確にする研究である。しかもその多くは個人の内的特性の研究であり、自己愛と関係性に関する研究は散見する程度である。そして、例えば友人関係の広さ、浅さの2次元と自己愛との関連を見た小塩 (1998) も含め、そこで扱われているのは他者への態度であり、自己愛の調節に関わる、二者の分かちがたい、力動的、情緒的な関係性

Table 1 Kohut の自己心理学に関する主な実証的研究のまとめ (1)

	研究者名	対象者	主な独立変数	主な従属変数	主な結果
1	Raskin & Hall, 1977	大学生71名	自己愛		NPI を作成。項目分析の結果、80項目とされた。
2	Emmons, 1984	研究Ⅰ：大学生451名 研究Ⅱ：大学生127名 (EPPSとNPI)、65名 (16PF、EPIとNPI) 研究Ⅲ：大学生51名	自己愛	性格傾向	NPI の信頼性と妥当性が確認された。また、NPI に関して4因子が得られた。そして、NPI の得点は一般的に見られる行動を反映すると考えられた。
3	大石・福田・篠置, 1987	大学生382名と短大生62名	自己愛	社会的望ましき	NPI 日本語版に関して、信頼性と妥当性が確認された。
4	小塩, 1998	国立・私立大学生、専門学校生265名	自己愛	自尊感情、友人関係	NPI 全体と自尊感情との間で正の相関関係にあったが、NPI の下位尺度である「注目・賞賛欲求」は、自尊感情の下位尺度との間で正と負の両方の相関が見られた。また、近年指摘されている青年期の友人関係の希薄化や表面化を捉える際に、自己愛という概念を考慮することが有用であると考えられた。
5	葛西, 1999	研究Ⅰ：大学生475名 研究Ⅱ：第1の被験者群：250名、第2の被験者群：394名	研究Ⅰ：自己愛 研究Ⅱ：日本的「誇大感」欲求		研究Ⅰ：自己愛尺度を日本語に訳したが、一致度は高かった。しかし、誇大感と呼ばれる側面に欧米的なものとの違いがあると考えられた。 研究Ⅱ：日本的「誇大感」尺度の信頼性と妥当性が確認された。
6	Wink, 1991	サンフランシスコの住人152名とカリフォルニア大学の学生198名	自己愛	人格特性、適応	既存の自己愛を測定する6尺度を因子分析し、「傷つきやすさ-感受性」因子と「誇大性-自己顕示性」因子の2因子を抽出。そして、「傷つきやすさ-感受性」因子は不健康な側面とより関連が高いと考えられた。
7	高橋, 1998	大学生208名	自己愛		計25項目、2因子からなるナルシズム尺度が作成された。また、尺度の信頼性・妥当性が確認された。
8	小塩, 2002	研究Ⅰ：大学生511名 研究Ⅱ：大学生384名	自己愛	研究Ⅰ：対人恐怖、攻撃行動、個人・社会志向性、精神健康 研究Ⅱ：友人による被験者のイメージ	理論的に指摘される2種類の自己愛について、自己愛総合と自己主張優位-注目・賞賛優位の2次元で分類を行った。そして、自己愛傾向が全体に高く「注目・賞賛欲求」が優位な者は対人恐怖的で精神的に不健康を示す傾向にある。一方で、「自己主張性」が優位な者は、対人恐怖傾向は示さず健康的である。

Table 1 Kohut の自己心理学に関する主な実証的研究のまとめ (2)

	研究者名	対象者	主な独立変数	主な従属変数	主な結果
9	緒賀, 2001	研究1: 大学1年生97名 研究2: 大学307名	自己対象関係体験	研究2: 自尊心、孤独感、ストレス反応、自己愛	自己対象関係体験尺度に関し、3因子を抽出。そして、全6項目を選定した。また、本研究で作成された質問紙はおおむねの点で想定したそれぞれの「自己対象関係体験」の概念をある程度測定していると考えられた。
10	上地・宮下, 2002	大学生390名	自己愛的脆弱性	自己愛、同一性混乱	筆者らが想定した5つの側面から、自己愛的脆弱性を測定する試みは、ある程度妥当なものであると考えられた。
11	角田, 1994	国立大学院、学部生、医療専門学校生302名	共感経験	孤独感、自意識	EESRの信頼性と妥当性を検討した。また、共感性と孤独感、自意識との関連から、共感性を4つに類型化した。

とは言いがたい。

一方、近年 Gabbard (1989) が報告されて以来、自己愛を一側面ではなく二側面として捉えた研究が報告されている。Gabbard (1989) では、臨床的な視点から自己愛人格障害の患者を、大きく「無関心型」と「過敏型」の2つに分類している。この報告は、Kohut の理論を受け継いでいると考えられる。国内では、この自己愛の2分類を考慮して葛西 (1999)、高橋 (1999)、相澤 (2002)、小塩 (2002) などが報告されている。これらの研究は、NPI または独自に自己愛を測定する尺度を作成して使用し、因子を抽出している。そして、自己愛を独立した2因子構造として下位尺度を抽出した研究は、Wink (1991) と高橋 (1999) など数が少ない。

## 2) 「自己対象」に関する尺度について

自己対象を実証的に捉えた研究としては、緒賀 (2002) や桑原 (2002) がある。その中で、緒賀 (2002) では自己対象を関係のあり方そのものを問うと言うよりも、具体的な人との関わりをどのように回答者が体験しているか、という視点から自己対象体験を捉え「自己対象関係体験尺度」を作成し、自尊心・孤独感・ストレス反応尺度・自己愛との関連を検討している。

一方桑原 (2002) では、特に母親は鏡映自己対象として自己愛の発達に重要な意味を持つと考えられるため、母親との関係性イメージに焦点を当て、自己愛や母子関係イメージとの関連を検討している。

いずれの研究も、自己心理学の重要な概念の一つである自己対象に関し実証的な研究を行っている。しかし、Kohut (1984) の言う様に、自己対象とは必ずしも特定した人物・事物を指していない。いずれの研究も、自らにとっての自己対象との関係のあり方を十分検討してはいないと考えられる。

そこで、これらの先行研究を踏まえて、自己対象を被験者自らが選択してイメージでき、その上で自己対象との関係のあり方を測定する尺度の作成が望まれる。

## 3) その他の自己心理学に関する尺度について

その他の自己心理学に関する実証的研究は、角田 (1991, 1992, 1993, 1994a, 1994b, 1995, 1998) が共感性を、上地・宮下 (2002) が自己愛的脆弱性を研究している。その中で、角田 (1998) では自己対象機能が自らの心的機能として内在化されたときに、今度は他者に対して自己対象機能を用いる基盤ができる、つまり

共感性の可能性が準備される、という視点から共感性と自己愛傾向を検討し、両者の関連が明らかにされている。また、上地・宮下（2002）では、自己愛の側面である「脆弱性」を中心にとりあげ尺度を作成し、その信頼性と妥当性を検討している。

#### IV. 研究の課題と方向性

以上、自己心理学に関する実証的研究を概観した。ここでは、研究の課題と今後の方向性を指摘したい。

既存の研究においては、まず自己愛を測定する尺度において、現在では一側面で捕らえた研究と二側面で捉えたものが存在する。そして、最近の動向では、国内外で自己愛を二側面で捉えようとする研究が増えてきている。これは、自己愛の実証的な研究に関しても、Kohut（1971, 1979, 1984）や Gabbard（1989）に代表される、精神分析的な理論や臨床実践を取り入れてきた結果であると考えられる。しかし、国内の自己愛を2側面と捉えた実証的研究は、現在まで尺度の作成が大半であった。したがって、他の変数との関連を検討する研究は、数少ない。今後は、高橋（1999）などの尺度を用いて、自己愛の2側面が他の変数とどのような関連があるのか、更に研究されることが望まれる。

次に、自己心理学の重要な概念の一つである自己対象体験を測定する尺度の作成が望まれる。Kohut（1984）を踏まえた、自らが対象を選択する形で自己対象体験について回答を求める質問紙は、国内では作成されていない。したがって、このような自己対象体験を測定する尺度を作成する必要がある。

そして、日本の文化的な背景をふまえて自己-自己対象関係を実証的に研究していくことが望まれる。この点については、例えば Doi（1989）や Maruta（1992）は、Kohut が提唱した自己-自

己対象関係と日本の「甘え」とは同様のものである、と論じている。また、葛西（1999）では誇大感について、日本人特有の構造があるのではないかと論じている。具体的には、日本の文化的な背景を踏まえた「甘え」を、自己-自己対象関係という観点から測定する尺度の開発などが考えられる。

このような試みは、臨床現場において様々な支持や注目を受けているが、客観的には説明が困難であるといわれる自己心理学について、実践の科学としての心理学の発展を促すものであると考えられる。

#### 参考・引用文献

- 相澤直樹 2002 自己愛的人格における誇大特性と過敏特性. 教育心理学研究, 50, 215-224.
- American Psychiatric Association 1980 *Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders Third Edition: DSM-III*. Washington, DC. (高橋 三郎・花田耕一・藤縄 昭訳 1983 DSM-III 精神疾患の分類と診断の手引き. 医学書院.)
- American Psychiatric Association 1994 *Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders forth Edition: DSM-IV*. Washington, DC. (高橋 三郎・大野 裕・染谷俊幸訳 1995 DSM-IV 精神疾患の分類と診断の手引き. 医学書院.)
- Broucek, F. 1982 Shame and its relationship to early narcissistic development. *International Journal of Psychoanalysis*, 63, 369-378.
- Doi, T. 1989 The concept of amae and its Psychoanalytic implications. *International Review of Psycho-Analysis*, 16, 349-354.
- Donna M. Orange, George E. Atwood and Robert D. Stolorow 1997 *Working Intersubjectively: Contextualism in Psychoanalytic Practice*. The Analytic Press Inc. (D.M. オレンジ G.E. アトウッド R.D. ストロロウ著 丸田俊彦・丸田郁子訳 1999 間主観的な治療の進め方 サイコセラピーとコンテクスト理論. 岩崎学術出版社.)

- 江口恵子 1966 依存性の研究. 教育心理学研究, 14, 45-58.
- Elson, M. Ed. 1987 *The Kohut Seminars on Self Psychology and Psychotherapy with Adolescents and Young Adults*. W.W. Norton & Company. (エルソン, M. 伊藤 洸監訳 1989, 1990, 1992. コフト自己心理学セミナー(1~3). 金剛出版.)
- Emmons, R. A. 1984 Factor analysis and construct validity of the narcissistic inventory. *Journal of Personality Assessment*, 48, 291-300.
- Emmons, R. A. 1987 Narcissism: Theory and Measurement. *Journal of Personality and Social Psychology*, 52, 11-17.
- 福田美由紀 1988 ナルシシズムの基礎的研究. 関西学院大学臨床教育学, 臨床教育心理学研究, 14, 39-50.
- 福田美由紀 1989 ナルシシズムの基礎的研究(2) 関西学院大学教育学科研究年報, 15, 57-75.
- 福田美由紀・大石史博・篠置昭男 19-87 ナルシシズム的人格の基礎的研究(2) -ナルシシズム的人格目録の信頼性と妥当性について-. 日本教育心理学会第29回総会発表論文集, 155, 534-535.
- Gabbard, G. O. 1989 Two subtypes of Narcissistic Personality Disorder. *Bulletin of the Menninger Clinic*, 53, 527-532.
- Goldberg, A. Ed. 1980 *Advances in self psychology*. New York: International Universities Press. (ゴールドバーグ, A. 編 岡 秀樹訳 1991 自己心理学とその臨床. 岩崎学術出版社.)
- 八田 泰 1992 誇大自己 氏原 寛・小川捷之・東山紘久・村瀬孝雄・山中康裕 共編 心理臨床大事典. 培風館. Pp.1004-1005.
- 八田 泰 1992 自己愛的憤怒 氏原 寛・小川捷之・東山紘久・村瀬孝雄・山中康裕 共編 心理臨床大事典. 培風館. Pp.1005-1006.
- 穂苅千恵 1992 自己対象 氏原 寛・小川捷之・東山紘久・村瀬孝雄・山中康裕 共編 心理臨床大事典. 培風館. Pp.1006-1007.
- 穂苅千恵 1992 自己対象転移 氏原 寛・小川捷之・東山紘久・村瀬孝雄・山中康裕 共編 心理臨床大事典. 培風館. Pp.1007-1008.
- 伊藤 洸 1992 コフトの自己心理学 氏原 寛・小川捷之・東山紘久・村瀬孝雄・山中康裕 共編 心理臨床大事典. 培風館. Pp.107-110.
- 伊藤 洸 1992 自己心理学 氏原 寛・小川捷之・東山紘久・村瀬孝雄・山中康裕 共編 心理臨床大事典. 培風館. Pp.1000-1001.
- Jay R. Greenberg & Stephen A. Mitchell 1983 *Object relations in Psychoanalytic theory*. Harvard University Press. (J.R. グリーンバーグ S.A. ミッチェル著 横井公一監訳 大阪精神分析研究会訳 2001 精神分析理論の展開 <欲動>から<関係>へ. ミネルヴァ書房.)
- 角田 豊 1991 共感経験尺度の作成. 京都大学教育学部紀要, 37, 248-258.
- 角田 豊 1992 共感経験尺度の妥当性-VTRを刺激とした感情内容別検討. 教育心理学研究, 40, 178-184.
- 角田 豊 1993 共感性と母親から共感されるイメージとの関連-自己対象機能の観点からみた共感性と性差について. 心理臨床学研究, 10, 76-81.
- 角田 豊 1994a 共感経験尺度改訂 (EES-R) の作成と共感性の類型化の試み. 教育心理学研究, 42, 193-200.
- 角田 豊 1994b 共感性と男性性・女性性の2側面との関連. 奈良女子大学文学部研究年報, 38, 135-151.
- 角田 豊 1995 とらえ直しによる治療者の共感的理解とクライエントの共感性について. 心理臨床学研究, 13, 145-156.
- 角田 豊 1998 共感性と自己愛傾向の関連共感経験尺度改訂版 (EESR) と自己愛人格目録 (NPI) を用いて. 心理臨床学研究, 16, 129-137.
- 上地雄一郎 1993 Self Psychology (Kohut 理論) の基礎概念についての臨床的検討 (I): 自己愛人格障害と自己対象転移について. 総合保健科学: 広島大学保健管理センター研究論文集, 9, 89-105.
- 上地雄一郎 1993 Self Psychology (Kohut 理論) の基礎概念についての臨床的検討 (II): Self Psychology からみた欲動理論とエディプス・コンプレックス. 総合保健科学: 広島大学保健管理センター

- 研究論文集, 9, 107-117.
- 上地雄一郎 1994 Self Psychology (Kohut 理論) の基礎概念についての臨床的検討 (Ⅲ): 中核自己と補償的構造. 総合保健科学: 広島大学保健管理センター研究論文集, 10, 63-77.
- 上地雄一郎・宮下一博 2002 コフォートの自己心理学に基づく自己心理学的脆弱性尺度の作成の試み. 甲南女子大学研究紀要, 38, 1-10.
- 葛西真記子 1999 日本版「誇大感」欲求尺度作成の試み. カウンセリング研究, 32, 134-144.
- 葛西真記子・市原庸寛 2002 高校生の社会的成熟度・規範行動・自己愛との関連性. 鳴門教育大学学校教育実践センター紀要17, 75-83.
- 川田三夫 2002 自己愛人格の尺度化の試み. 秋草学園短期大学紀要, 19, 43-62.
- 金城辰夫・伊藤博子 2001 自己愛傾向に関する質問紙法的研究. 専修人文論集, 68, 31-71.
- Kohut, H. 1971 *The Analysis of the self*. New York: International Universities Press. (コフォート, H. 1994 水野信義・笠原 嘉監訳 自己の分析. みすず書房.)
- Kohut, H. 1977 *The Restoration of the Self*. New York: International Universities Press. (コフォート, H. 1995 本城秀次・笠原嘉 監訳 自己の修復. みすず書房.)
- Kohut, H. 1984 *How does Analysis cure?* Chicago and London: The University of Chicago Press. (コフォート, H. 1995 本城秀次・笠原 嘉監訳 自己の治癒. みすず書房.)
- 小松貴弘 1992 ナルシズムに関する一考察—Kohut のナルシズム論の検討—. 広島大学教育学部紀要, 41, 199-206.
- 久米禎子 2001 依存のあり方を通してみた青年期の友人関係—自己の安定性との関連から—. 京都大学大学院教育学研究科紀要, 47, 488-499.
- 桑原晴子 2002 自己愛についての一考察—自己対象体験の視点から—. 京都大学大学院教育学研究科紀要, 48, 271-283.
- Lapan, R. & Patton, M. J. 1986 Self-psychology and adolescent process: measures of pseudo-autonomy and peer-group dependence. *Journal of Counseling Psychology*, 33, 136-142.
- 前田重治 1985 図説臨床精神分析学. 誠信書房.
- 前田重治 1994 続 図説臨床精神分析学. 誠信書房.
- 丸田俊彦 1992 理論により技法はどう変わるか—自己心理学的治療の実際—. 岩崎学術出版社.
- Maruta, T. 1992 Does an American puppy amaeru?: A comment on Dr. Doi's paper. *Infant Mental Health Journal*, 13, 12-17.
- 宮下一博・上地雄一郎 1985 青年におけるナルシズム (自己愛) 的傾向に関する実証的研究(1). 総合保健科学, 1, 51-61.
- 中村留貴子 1992 自己愛 (ナルシズム). 氏原 寛・小川捷之・東山紘久・村瀬孝雄・山中康裕 共編 心理臨床大事典. 培風館. Pp.1001-1003.
- 中村留貴子 1992 自己愛的同一視. 氏原 寛・小川捷之・東山紘久・村瀬孝雄・山中康裕 共編 心理臨床大事典. 培風館. Pp.1003-1004.
- 中西信男 1991 コフォートの心理療法自己心理学的精神分析の理論と技法. ナカニシヤ出版.
- 中西信男・葛西真記子・松山公一 1997 精神分析的カウンセリング—精神分析とカウンセリングの基礎—. ナカニシヤ出版.
- 中西信男・佐方哲彦 1986 ナルシズム時代の人間学. 福村出版.
- 緒賀 聡 1993 自己—対象関係尺度作成の試み—女子青年を対象とした予備的調査—. カウンセリング研究, 26, 38-44.
- 緒賀郷志 2001 自己対象体験尺度作成に関する基礎的研究—質問項目と妥当性の検討—. 岐阜大学教育学部研究報告人文科学, 50(1), 125-132.
- 岡田 努 1993 現代青年の友人関係に関する考察. 青年心理学研究, 5, 43-55.
- 岡田 努 1999 現代青年に特有な友人関係の取り方と自己愛傾向の関連について. 立教大学教職研究, 9, 21-31.
- 大石史博 1987 ナルシズムの心理学的研究(1). 関西学院大学人文論究, 37, 27-44.
- 大石史博・福田美由紀・篠置昭男 1987 ナルシズム的人格の基礎的研究(1)—ナルシズム的人格目録

- の信頼性と妥当性について－. 日本教育心理学会第29回総会発表論文集, 155, 534-535.
- Ornstein, P.H. 1950 *The search for the self; Selected writing of Heinz Kohut*. New York : International Universities Press. (伊藤 洸訳 1987 コフト入門：自己の探求. 岩崎学術出版社.)
- 小塩真司 1995 自己愛的性格傾向と依存性－青年男子を対象として－. 教育心理学論集, 25, 23-36.
- 小塩真司 1997 自己愛的傾向に関する基礎的研究－自尊感情、社会的望ましさととの関連－. 名古屋大学教育学部紀要 (心理学), 44, 155-163.
- 小塩真司 1999 高校生における自己愛傾向と友人関係のあり方との関連. 性格心理学研究, 8, 1-11.
- 小塩真司 2001 自己愛傾向が自己像の不安定性、自尊感情のレベルおよび変動性に及ぼす影響. 性格心理学研究, 10(1), 35-44.
- 小塩真司 2002 自己愛傾向によって青年を分類する試み－対人関係と適応, 友人によるイメージ評定からみた特徴－. 教育心理学研究 50, 261-270.
- Raskin, R.N., and Hall, C.S. 1979 A Narcissistic Personality inventory. *Psychological Reports*, 45, 590.
- Raskin, R.N., and Hall, C.S. 1981 The narcissistic personality inventory: Alternate-form reliability and future evidence of construct validity. *Journal of Personality Assessment*, 45, 159-162.
- Ronald R. Lee & J. Colby Martin 1991 *Psychotherapy after Kohut: A textbook of self psychology*. The Analytic Press, Inc. (R.R. リー J. C. マーティン著 竹久安彦 堀 史朗 監訳 1993 自己心理学精神療法 コフト以前からコフト以後へ. 岩崎学術出版社.)
- 佐方哲彦 1986 自己愛人格の心理測定－自己愛人格目録 (NPI) の開発. 和歌山県立医科大学進学課程紀要, 16, 77-86.
- 佐方哲彦 1987 自己愛人格目録 (NPI) の妥当性に関する研究－Y-G検査およびMPI, MMPI との相関から－. 日本教育心理学会第29回総会発表論文集, 155, 538-539.
- 関 智恵子 1982 人格適応面からみた依存性の研究－自己像との関連において－. 京都大学教育学部心理教育相談室臨床心理事例研究, 9, 230-249.
- 清水健司 2002 青年期における対人恐怖申請と自己愛傾向の関連. 教育心理学研究, 50, 54-64.
- 関口 愛・吉川佳余 2002 他者意識の違いによる青年期の友人関係について－対人恐怖心性と自己愛傾向との関連から－. 明治学院大学文学研究科心理学専攻紀要, 7, 19-33.
- 高橋智子 1998 青年のナルシズムに関する研究－ナルシズムの2つの側面を測定する尺度の作成. 日本教育心理学会第40回総会発表論文集, 147.
- Watson P.J., Hickman S.E., Morris R.J., Milliron J.T. and Whiting Linda 1993 Narcissism, Self-esteem and Parental Nurtrance. *The Journal of Psychology*, 129, 61-73.
- 山本昌輝 1992 コフト 氏原 寛・小川捷之・東山 紘久・村瀬孝雄・山中康裕 共編 心理臨床大事典 培風館 P.1254
- 安田一郎 1992 ナルシズム概念の変遷. 横浜国立大学論叢人文科学系列, 43, 9-75.